



2012年(平成24年)
7月号(No. 806)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成24年度通常総会	
プロジェクトチームの成果で再生の兆し	1
平成23年度事業報告	4
貸借対照表	5
正味財産増減計算書	6
財務諸表に対する注記、附属明細書、財産目録	7
財産目録記載外のその他物品リスト	8
竹内洋岳さん、ダウラギリ登頂。	
8000 ⁺ 峰14座コンプリート	9
第32回日本登山医学会学術集会	11
国際山岳年プラス10シンポジウム報告	12
東西南北	13
尾瀬の国有化を積極的に	
活動報告	14
山研運営委員会	
支部だより	15
越後支部／東九州支部／北九州支部	
図書紹介	18
会務報告	20
図書受入報告	21
新入会員	22
ルーム日誌	22
会員異動	23
INFORMATION	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 ……10～20時
水・金 ……13～20時
第2、第4土曜日 ……閉室
第1、第3、第5土曜日 ……10～18時
夏季休室 ……8月11日～19日

平成24年度通常総会 プロジェクトチームの成果で再生の兆し

公益社団法人となって初めての通常総会が開催された。尾上昇会長からは、YOUTH CLUBをはじめとする現在進行中のプロジェクトについて、成果、改善の兆しがみえてきたとの報告があった。また、5つの新支部が誕生した。

平成24年度の通常総会が6月16日午後2時から東京・六番町の主婦会館プラザエフで開かれた。会員110人が出席し、①平成23年度事業報告案②平成23年度収支決算・財産目録案③平成24年度除籍予定者について審議し、いずれも原案どおり可決承認した。議事は淡々と進行し、事業報告・収支決算案について質疑もなく1時間半で終えた。長丁場だった昨年と

は打って変わつてのスピード審議だった。(事業報告等の詳細内容は別掲)

■会長挨拶 前途に曙光みえてきた

この日の総会には3797の委任状が提出された。出席者・委任状提出者を合わせると3907人と、会員総数の過半数となり、総会は無効に成立した。総会を開く

ために必要な最小限度の出席者／定足数は、従来3分の1以上だったが、新しい定款で、過半数となった。高原三平総務担当常務理事の司会で議事を進めた。

冒頭、尾上昇会長はあいさつのなかで、次のように語った。

一、日本山岳会は4月1日から公益社団法人となり、新しい法人としてスタートした。今回は、記念すべき総会である。公益社団法人への移行に際し2年半にわたって献身的な努力を続けてきたプロジェクトチームに心からお礼を申し上げたい。専門機関に任せるのではなく、自分たちで進めてきた。日本山岳会にはすごいパワーがあり、それを発揮できる高い能力をもっていると感じさせられた。

一、3年前、会は大きな課題を

いくつもかかえていた。会員の漸減傾向、若い会員の少ないこと、それらによる会の態勢の衰え、財務危機……。再生に向け、いくつかのプロジェクトチームを立ち上げた。みなさんの努力により、改善の兆しがみえてきているが、今年度、さらに会員受益検討チームを立ち上げた。「日本山岳会の会員になつてどんなメリットがあるか」という質問に対して明確な答えを出したい。われわれは、メリットを肌で感じているが、新しい人にもどう伝えていくか考えていきたい。

一、JAC-YOUTHプロジェクトで若い人を育成、また入会を歓迎してきた。その成果があつて若い人が増えてきた。これを発展解消させYOUTH CLUBとした。従来の指導委、学生部、青

年部をひとつにまとめた。2年間で1000万円を投入することを3月の総会で承認いただいた。運営に邁進していただき再生の引き金とした。ようやく曙光がみえてきたと感じている。

■事業報告・収支決算

収支、わずかながら黒字に転換

議案審議を開始した。高原常務理事が事業報告を、小林義亮財務担当常務理事が収支決算・財産目録等を説明した。

「事業報告」新しい公益法人制度に対応させて公益目的事業と共益目的事業に仕分けしてきた。公益目的事業では、支部による児童・青少年の育成事業が活発だ。埼玉で障害者とのふれあい登山、京都で登山教室、東京多摩で小学生と高尾山ハイキング、山形でJAC会員と一緒に登ろう、東九州で青少年体験登山大会など。山岳環境保全事業もウエートが高くなっている。福井支部の森づくり、高尾の森づくり、東海が猿投の森での調査活動、京都が藤尾の森づくりなど。

JAC-YOUTHでは、非会員の若者を対象とした机上講習会

や登山講習会、また学校山岳部の部員のスキルアップを図った。「山の日」制定プロジェクトでは「山の日」制定に向けて活動を続けた。共益目的事業は、会員のための事業として欠かすことのできない重要なものが多い。恒例の23年度年次晩餐会には425名が参加した。

「収支決算など」決算は公益法人会計基準(平成20年基準)に沿って行なった。正味財産増減計算書によると、23年度の経常収益は8756万円、費用は8664万円となり、差し引き92万3790円の黒字となった。前年度は1480万円の赤字だった。

ひと息ついた格好だが、これは①入会金・会費収入がふえた②前期のような特別支出がなくなった③みんなが経費削減に努力した——ことによるものだ。入会金・会費収入は前期比178万円の増加となった。しかし、長期的にみると、高齢化による会員の退会等が続くとみなければならず、長期低落傾向にはどめがかかっていない。下りのエスカレーターを懸命になって駆け上げているようなものだ。経常収益は、2132万円の増



100人余りの会員の出席があった

加。総額主義を採用し年次晩餐会の会費収入を計上、また支部に対する受取助成金等を組み入れたため、計算上は大きく膨らんだ。年次晩餐会の会費収入は620万円、支出は642万円で差し引き21万円の赤字。その他事業収益・事業費として計上した。支部助成金・寄付金は国土緑化推進機構などからの森づくり活動への補助金など。山研使用料は天候不順、道路決壊などの影響で127万円にとどまった。前年比38%減。

収支は前年度に比べ1572万円改善した。その要因を分析すると、178万円の入会金・会費増のほか、修繕費・賃借料減45

5万円、人件費減245万円、HP外注120万円減、経費削減117万円などだった。

これらに対し平井拓雄監事から収支計算書等が正確かつ妥当であり、また理事の業務執行が誠実に行われたことを認める監査報告があった。議事は質疑応答に進んだ。質疑なし。尾上議長が発言をうながしたが、応答なし。採決にはいり、拍手多数でもって承認した。2時59分だった。

■除籍予定者 24年度は85人

平成24年度の除籍対象者は85人。会費を22・23年度の2年間滞納している会員が対象となる。1年でもいいから会費を納入してとどまっていきたいとの要請があった。これに対し、長田義則会員(5465)から「除籍されてしまうと退会できないのか」と、初めて質問があった。さる会員が除籍対象となり退会しようと思ったら除名となるので退会できないといわれたという。高原常務理事は「除名とは異なる。除籍の場合、復活制度があり、2名の推薦者を得て、かつての会員番号で会員資格を復活できる。その場合の在籍年数は以



5人の新支部長からのあいさつ

前の在籍年数も加えることにな
る」と応えた。吉永副会長は「除名
は会の名誉を傷つけたときなどで
総会の決議が必要だ。3分の2以
上の議決権が求められる。会費を
納入すれば退会はできる」などと
追加した。高橋二義会員(788
5)は「除籍対象となっていること
を推薦者にも伝えてほしい」と述
べた。

■新支部長紹介

初めての女性支部長誕生
新しい5人の支部長が紹介さ
れた。埼玉の大久保支部長は日本
山岳会初めての女性支部長、四国
支部は、ことし2月に発足したば

かり。大きな拍手に迎えられ、会
場前に進んで、次のように抱負を
語った。それぞれに「責任の重さ
を痛感している」といささか緊張
した面持ちだった。

岩手・菅原敏夫支部長(117

65) 岩手には新幹線で簡単に
来られるようになった。東京を朝
たてば、その日のうちに岩手山の
登山口に立つことができる。おい
でください。東日本大震災に際し
ては、義援金30万円をいただいた。
沿岸部にある3つの高校山岳部に
活動資金として寄付した。ありが
とうございました。

埼玉・大久保春美支部長(72

49) 支部設立3年目にして支
部長を拝命した。大学4年生の時
から30歳代前半まで、日本山岳会
婦人懇談会や集会委員会等でお世
話になった。先輩たちの支援をい
ただきながら海外遠征に参加した。
山への想いと、日本山岳会への恩
返しという気持ちを抱きつつ、定
年になり山を再開した。自分の山
登りをするつもりが、支部の立ち
上げにかかわったことで、支部長
の役を引き受けることになった。
ご指導をいただきたい。

福井・森田信夫支部長(145

76) 福井は「日本真ん中支部」
として京都、岐阜、石川、富山と
一緒に活動させていただいている。
大学時代、山岳遭難がよく起きた。
「山岳部には入るな」と言われ、ス
キー部に入った。海外登山と岩登
りは経験がない。最近、体調第
一で古社寺のあるような歴史的な
山にゆつくり登っている。若い人
と一緒に活動したい。

四国・尾野益大支部長(133

05) 1968年生まれで44歳。
全国31支部のなかで、いちばん若
いと思う。支部も発足したばかり
ご指導いただきたい。四国は、日
本山岳会発起人のひとりで初代会
長である小島烏水の生誕地だ。高
松に顕彰碑を建てて「烏水祭」を開
催していきたい。来年は生誕14
0年の節目の年にあたる。4月14
日に高松市で実施することを考え
ている。

福岡・中馬重人支部長(622

2) 山の年齢は、そこそこになっ
た。精神年齢は若くありたいと思
っている。なにができるか分から
ないが、助けを借りてがんばりた
い。支部会員アンケートを取り、支
部に対する希望を聞きたいと思っ
ている。(新支部長のあいさつには、

午前中に行なわれた支部長会議で
の発言も含めた)

総会終了後、3時45分から懇親
会を開いた。西村政晃副会長が音
頭をとって乾杯し、和やかな歓談
を続けた。

(写真・文)高橋重之

烏水レリーフを四国に寄託 贈呈式行なわれる

来年4月に「烏水祭」開催へ

通常総会終了後、小島烏水のレ
リーフを四国支部に寄託する贈呈
式が行なわれた。尾野支部長は、新
支部長あいさつのなかで「生誕地
の高松に顕彰碑を建てたい」と語
ったが、実は顕彰碑にレリーフを
埋め込みたいという希望を理事会
に伝えていた。検討の結果、四国
支部に寄託することになり、この
日の贈呈式となった。

尾上会長は「烏水祭の開催は支
部総会で決定済み。顕彰碑は、高
松城址の公園の一角に建設される
といいのではないか」などと語っ
た。レリーフは横38センチ、縦52センチ、厚
さ1・8センチの銅製。ずいぶん重い。
尾野支部長は「レリーフも重い
責任はもつと重い。ありがとうご
ざいました」と謝辞を述べた。



総会、支部長会議それぞれあいさつをする尾上会長

レリーフは一時、行方不明になったことがある。昨年、砂田定夫会員の指摘で探したところ、偶然にも上高地・山研の倉庫にあるのを管理人が発見した。彫刻家の佐藤久一朗(名誉会員)が1950年に制作した。上高地のウェストン、金山平の木暮理太郎、また六甲山麓の藤木九三のレリーフなどを制作。横有恒、小西政継、植村直己らとの輝かしい活動記録を残している。

支部長会議開く

25年度全国支部懇は静岡で

平成24年度第1回支部長会議が、通常総会に先立って午前10時30分から日本山岳会104会議室で開かれた。全国31支部から、それぞれの支部の現況と24年度事業計画を報告してもらい、本部からは会務報告、またプロジェクトチ

ームの活動状況などを説明した。尾上会長は、あいさつのなかで「まだ決定ではない」としながらも、名誉会員の推薦について、規約を変える意向を明らかにした。名誉会員の推薦について、かねて疑問を持っていたという。日本山岳会は、同好の士の集まりであり、会員は平等、同格の立場であるはずだ。会員のうえに、さらに「名誉」をつけて崇めることはしない。形骸化した規約を改め、たとえば、第三者であって日本山岳会に多大なる貢献をされたような人を推薦するようにしたいなどと話した。

「山の日」制定プロジェクトからは成川隆顕会員に代わってリーダーとなった萩原浩司理事が活動報告した。実施日について全国支部にアンケートを実施したところ、6月第1日曜日がもっとも多く、約7割を占めた。10月3日に全国「山の日」ネットワーク会議を開催する。支部活性化プロジェクトからは宮崎紘一リーダーが、全国支部懇談会の開催を、ことしの千葉支部のあと、来年は静岡支部にお願いしたい、その次には埼玉支部が手を挙げている、と話した。

(文) 高橋重之

4月29日～30日	バハルフェスタin九重・自然観察会(80名参加)(福岡)
5月29日	播磨祭(支部員25名参加)(富山)
5月14日～11月26日	分境嶺踏査山行(4回開催、延べ165名参加(東京多摩))
5月15日～2月19日	ハイキングセミナー(5回開催、延べ80名参加、指導者延べ44名)(静岡)
5月22日～23日	海のウェストン祭支援事業(10名参加)(越後)
5月28日～29日	泰澄祭(福井)
7月23日、31日	沢登り講習会(青年部)
5月22日、9月11日	第6、7回登山教室(延べ82名参加)(熊本)
11月、12月	机上講習会4回(青年部・BC)
6月11日～12日	今西レリーフを守る会(京都)
7月10日	第7回山の博覧会(山梨)
7月25日	第54回高頭祭(支部員約60名参加)(越後)
7月9日	第4回夏の山岳映画の夕べ(60名参加)(栃木)
9月25日	第23回藤木祭(ハイキング23名参加)(関西)
10月16日	第52回木暮祭(山梨)
10月29日	第3回ヒマラヤの集い(50名参加)(栃木)
11月5日	第27回宮崎ウェストン祭(約150名参加)(宮崎)
11月13日	第5回秋季講演会(41名参加)(栃木)
1月21日	岳人のつどい(80名参加)(福岡)
3月10日	フォーラム「登山を楽しむ科学」(約210名参加)(科学)
3月26日	山岳映画祭(24名参加)(資料映像)
通年	オホーツク分水嶺調査9回(延べ56名参加)(北海道)
通年	房総半島分水嶺踏査(千葉)
通年	近畿分水嶺踏査(関西)
通年	登山教室(関西)
通年	登山講座講師派遣(中国新聞社文化センター登山教室)(12回開催、延べ1507名参加)(広島)
通年	朝日・中日・NHK等文化センター登山教室(4期開催)(東海)
(4)事故防止事業	
6月12日	倉ヶ岳登攀訓練(11名参加)(石川)
6月15日～1月28日	第3～5回安全登山講習会(延べ200名参加)(埼玉)
12月17日～18日	雪上訓練(青年部)

公益社団法人 日本山岳会 平成23年度事業報告(主な事業)

平成23年4月1日～平成24年3月31日

1. 公益目的事業

(1)登山に関する文化・学術の振興事業

4月～11月	ミニ水力発電装置運営(山研・ミニ水力発電運営)
6月	「山岳」106年(2011年)の発行(山岳編集)
6月15日	英文ジャーナル(Japanese Alpine News vol.12)の発行
6月4日～5日	第65回ウェストン祭(上高地)(信濃)
7月、2月	海外登山助成金の審査・交付
11月5日	第15回全国山岳博物館等連絡会議(20名参加)(資料映像)
12月3日	第12回秩父宮記念山岳賞(該当者なし)
通年	図書室の整備・研究(図書管理・図書)
通年	登山資料・山岳絵画の整備(延べ30名参加)(資料映像)
通年	「山の日」制定プロジェクトの推進
通年	登山道調査(山岳地理)

(2)児童・青少年の育成事業

4月17日	障害者とのふれあい登山(63名参加)(埼玉)
4月～10月	登山教室(京都)
5月7日	自然観察会/小学生と高尾山ハイキング(37名参加)(東京多摩)
7月3日、10月2日	JAC会員と一緒に登ろう(延べ55名参加)(山形)
7月24日	青少年体験登山大会(東九州)
7月29日～31日	第12回自然児学校(児童16名、スタッフ25名参加)(北海道)

7月31日～8月1日	第14回子ども登山教室(55名参加)(宮崎)
8月1日～15日	上高地インタープリタ夏期集中行事(延べ36日開催、延べ882名参加)(山の自然学研究会)
11月13日	第18回視覚障害者支援登山大会(東九州)
秋季	東海学生山岳連盟への支援活動(東海)

(3)スポーツ及び登山に関する教育・啓蒙事業

4月10日～1月28日	第20～24回講演会(水質浄化、地図、岡宮林蔵など)(延べ235名参加)(茨城)
4月23日～24日	第30回深田祭(山梨)

7月8～18日 夏の欧州アルプス山行(6名参加)(集会)
 2月1日～14日 パタゴニア・トレッキング(23名参加)(集会)
 9月10日～11日 クライミング集会(学生)
 9月12日～15日 北アルプス山行(10名参加)(集会)
 10月15日～16日 第27回全国支部懇談会(宮城)
 10月30日 第40回山岳史懇談会(50名参加)(図書)
 11月19日 5支部合同懇親山行(45名参加)(岐阜)
 11月7日 新入会員オリエンテーション(37名出席)(総務)
 11月12日 第48回学生部所属大学山岳部マラソン大会(学生)
 12月3日 平成23年度年次晩餐会(425名参加)(総務)
 12月4日 晩餐会記念山行(107名参加)(集会)
 12月12日 第41回山岳図書を語る夕べ(35名)(図書)
 1月28日～29日 アイスクライミング集会(学生)
 5月21日、2月18日 第28、29回図書交換会(延べ55名参加)(図書)
 冬季 アイスクライミング研修会(東海)
 通年 会報「山」791号～802号の発行
 通年 インターネットホームページの運営(インターネット)

通年 機関紙「木の目草の芽」を6回刊行(自然保護)

(2)海外登山等

4月～10月(遠征10月17日～11月11日) シンゲーチュリ登山隊2011(4名参加)(海外)

(3)会議等

通常総会の開催(2回)
 理事会の開催(12回)
 常務理事会の開催(12回)
 支部長会議(2回)
 支部事務局担当者会議の開催(2回)
 評議員会の開催(3回)
 委員長会議(3回)
 日本山岳会再生プロジェクトの推進

1) 新法人移行プロジェクト

公益社団法人への移行事務手続き
 規程類の整備
 公益会計基準を各支部・各委員会へ説明・助言

2) JAC-YOUTHプロジェクト

若い会員の入会促進を図った。
 日本山岳会の将来を担うリーダーの育成を行なった。

3) 支部活性化プロジェクト

四国支部の設立を働きかけ、設立準備の手助けして設立総会に参加した。

全国支部懇親会の開催支部の調整をし24年度は千葉支部に決定した。

公益法人移行に伴う支部運営の問題を検討し解決策を探る。継続中
 支部化の可能性のある地域の情報を分析し可能性を探った。継続中

4) ルーム検討プロジェクト

魅力あるルーム像の検討をした。

貸借対照表

平成24年3月31日現在

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増 減
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	45,160,559	14,525,573	30,634,986
未収会費	6,288,000	4,392,000	1,896,000
未収金	62,500	162,500	△100,000
貯蔵品	2,085,954	1,595,888	490,066
流動資産合計	53,597,013	20,675,961	32,921,052
2 固定資産			
(1)基本財産			
貸付信託	5,790,000	8,000,000	△2,210,000
定期預金	2,210,000	0	2,210,000
基本財産合計	8,000,000	8,000,000	0
(2)特定資産			
秩父宮記念基金	15,200,000	15,200,000	0
海外登山基金	42,500,000	58,800,000	△16,300,000
遭難防止事業基金	10,000,000	10,000,000	0
長期計画準備金	33,954,000	33,954,000	0
退職給付引当資産	3,954,500	3,986,350	△31,850
特定資産合計	105,608,500	121,940,350	△16,331,850
(3)その他固定資産			
土地	86,737,705	86,737,705	0
建物	73,874,026	79,345,209	△5,471,183

4月～5月、12月～1月 携帯メールで読める登山者のための天気予報実施(指導)

12月～2月 雪崩研修7回(延べ90名参加)(北海道)

2月11日～12日、3月20日 大山登山パトロール(延べ6名参加)(山陰)

1月28日～29日 雪山実地講習会1回(青年)

1月～3月 雪山入門教室3回(青年・学生)

(5)山岳環境保全事業

4月～11月 夜叉ヶ池ヤシャゲンゴロウパトロール(福井)

4月～12月 権現の森づくり(17回実施、延べ202名参加)(岐阜)

5月21日～11月12日 ふるさと登山道整備事業(36名参加)(石川)

5月～9月 山岳レンジャー活動(山梨)

6月4日 久住山開き清掃登山(東九州)

6月11日～12日 自然保護全国集会(89名参加)(自然保護・福岡)

6月12日 大平山山開き清掃登山(約90人参加)(秋田)

6月11日、7月16日 吾妻山登山道整備(福島)

8月、9月、2月 宮崎水源の森づくり育林活動(延べ25名参加)(宮崎)

6月、8月 吾妻山酸ヶ平植生回復支援事業(福島)

6月～9月 高山植物盗掘防止事業(延べ30名参加)(北海道)

6月24日～26日 白神山地ブナ林再生事業(12名参加)(青森)

6月26日、9月25日 森づくりプロジェクト(延べ9名参加)(埼玉)

7月3日 高山植物盗掘防止パトロール(約30名参加)(青森)

9月14日 自然保護シンポジウム(26名参加)(埼玉)

10月29日～30日 第15回森の勉強会(京都)

春季、秋季 福井支部森づくり(福井)

通年 陀羅仏小屋一般開放(京都)

通年 森林観察道建設など「国際森林年」記念事業(東海)

通年 大山横手道上ブナを育成する会(植樹祭5名参加)(山陰)

通年 高尾の森づくり(高尾の森づくりの会)

通年 猿投の森での調査活動(東海)

通年 藤尾の森づくり(京都)

通年 大山頂上トイレの汚泥キャリアダウンボランティア(山陰)

通年 森林保全巡視活動(延べ660名参加)(北九州)

(6)国際交流事業

8月12日～18日 日韓学生交流登山(韓国開催、日本側12名参加)(学生)

(7)その他目的を達成するための事業

①山岳遭難の予防と対策に関する関係団体との協議

②国内関係団体(日本山岳協会、東京都山岳連盟、日本ネパール協会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本山岳ガイド協会、日本山岳文化学会等)との連携

③「国際山岳年プラス10」への参加

④海外登山団体との情報交換及び機関誌の交換等

⑤国内山岳博物館・美術館との提携

⑥「上高地山岳研究所」の運用

⑦日本山岳会再生プロジェクトの推進

1) JAC-YOUTHプロジェクト

①非会員の若者を対象とした各種の机上講習会や登山講習会を実施した。

②地方支部の若い会員や非会員の若い登山家を対象とした支援を実施した。

③学校山岳部の部員のスキルアップを図った。

2)「山の日」制定プロジェクト

①日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳ガイド協会、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストと連携し、「山の日」制定協議会の代表幹事役として6回の会合をもった。

②「山の日」制定協議会として、リーフレットを2点発行し、広く山の関係者に配布、「山の日」の周知に努めた。

③「岳都松本(山岳フォーラム)」を「山の日」制定協議会の一員として後援。また実行委の構成員として参画し「山の日」をアピールした。

④当会ホームページに「山の日」に関する記事を掲載し、広報活動に努めた。

⑤31支部に「山の日」の活動のアンケートを実施した。

⑥国会議員への働きかけを準備した。

2. 共益目的事業(会員のための事業)

(1)登山、集会、施設の運用等

5月28日～29日 探索山行「伊豆大島三原山で火山活動をみる」(37名参加)(科学)

7月16日 第4回講演会語り継ぐ日本山岳会の歴史(16名参加)(資料映像)

6月4日～5日 新入会員のための徳本峠越えとウェストン祭(12名参加)(山研)

科 目	当年度	前年度	増 減
山岳研究所減価償却費	3,813,854	3,813,854	0
山岳研究所管理費	0	2,478,442	△2,478,442
ミニ水力発電事業費	30,000	0	30,000
発電装置減価償却費	171,753	171,753	0
海外登山補助費	550,800	1,100,000	△549,200
その他事業費	9,623,330	10,857,153	△1,233,823
支出寄付金（震災）	4,741,162	0	4,741,162
刊行物発送費	0	4,687,887	△4,687,887
事業管理費	20,294,245	0	20,294,245
事業費計	83,200,886	49,100,606	34,100,280
管理費			
給料手当	2,318,160	12,953,955	△10,635,795
臨時雇賃金	20,638	0	20,638
退職給付費用	29,926	563,043	△533,117
福利厚生費	147,812	2,209,374	△2,061,562
旅費交通費	159,231	278,490	△119,259
通信運搬費	152,751	423,517	△270,766
会議費	45,649	117,996	△72,347
什器備品費	0	227,717	△227,717
消耗品費	17,841	99,442	△81,601
修繕費	0	3,065,300	△3,065,300
印刷製本費	90,193	1,200,355	△1,110,162
光熱水量費	29,697	642,407	△612,710
電話料	21,966	342,780	△320,814
賃借料	0	1,485,000	△1,485,000
保険料	13,507	215,470	△201,963
租税公課	38,556	642,400	△603,844
負担金	2,400	20,000	△17,600
支払手数料	119,666	616,006	△496,340
建物減価償却費	5,966	1,657,329	△1,651,363
什器備品減価償却費	0	68,395	△68,395
事務所管理費	98,401	1,638,750	△1,540,349
その他管理費	28,113	1,973,223	△1,945,110
雑費	102,296	1,501,173	△1,398,877
管理費計	3,442,769	31,942,122	△28,499,353
経常費用計	86,643,655	81,042,728	5,600,927
評価損益等調整前当期経常増減額	923,790	△14,802,356	15,726,146
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	923,790	△14,802,356	15,726,146
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
指定正味財産額への振替額	△33,200,000	0	△33,200,000
当期一般正味財産増減額	△32,276,210	△14,802,356	△17,473,854
一般正味財産期首残高	313,906,872	328,709,228	△14,802,356
一般正味財産期末残高	281,630,662	313,906,872	△32,276,210
Ⅱ 指定正味財産増減の部			
基本財産	8,000,000	0	8,000,000
秩父宮記念基金	15,200,000	0	15,200,000
遭難防止事業基金	10,000,000	0	10,000,000
期指定正味財産増減額	33,200,000	0	33,200,000
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	33,200,000	0	33,200,000
Ⅲ 正味財産期末残高	314,830,662	313,906,872	923,790

(注) 1 前年度の山岳研究所管理費については、当年度においては山岳研究所事業費として計上している。また、前年度の管理費に含まれていた各事業の管理費は、事業費の事業管理費等に含めている。

以上の表示方法の変更は、公益法人会計基準（平成20年基準）を適用するために行ったものである。

2 基本財産及び指定財産（秩父宮記念基金及び遭難防止事業基金）33,200千円については昨年度末決算まで貸借対照表の一般正味財産としていたが、使途が寄付者等によって指定された財産であるので、公益法人会計基準に従って一般正味財産から指定正味財産に振り替え、表示方法の修正を行った。

什器備品	1	1	0
機械装置	1,684,144	1,855,897	△171,753
その他固定資産合計	162,295,876	167,938,812	△5,642,936
固定資産合計	275,904,376	297,879,162	△21,974,786
資産合計	329,501,389	318,555,123	10,946,266
Ⅱ 負債の部			
1 流動負債			
前受金	104,000	72,000	32,000
預り金	10,612,227	589,901	10,022,326
流動負債合計	10,716,227	661,901	10,054,326
2 固定負債			
退職給与引当金	3,954,500	3,986,350	△31,850
固定負債合計	3,954,500	3,986,350	△31,850
負債合計	14,670,727	4,648,251	10,022,476
Ⅲ 正味財産の部			
1 指定正味財産			
寄付金	33,200,000	0	33,200,000
指定正味財産合計	33,200,000	0	33,200,000
（うち基本財産への充当額）	(8,000,000)	(0)	(8,000,000)
（うち特定資産への充当額）	(25,200,000)	(0)	(25,200,000)
2 一般正味財産	281,630,662	313,906,872	△32,276,210
（うち基本財産への充当額）	(0)	(8,000,000)	(△8,000,000)
（うち特定資産への充当額）	(76,454,000)	(117,954,000)	(△41,500,000)
正味財産合計	314,830,662	313,906,872	923,790
負債及び正味財産合計	329,501,389	318,555,123	10,946,266

正味財産増減計算書

平成23年4月1日から平成24年3月31日まで（単位：円）

科 目	当年度	前年度	増 減
Ⅰ 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益			
基本財産受取利息	4,371	6,011	△1,640
特定資産運用益			
特定資産受取利息	41,091	0	41,091
受取入会金			
受取入会金	3,380,000	2,940,000	440,000
受取会費			
通常会費	56,885,210	55,589,000	1,296,210
終身会費	72,400	22,800	49,600
事業収益			
広告料収益	1,569,370	1,719,770	△150,400
刊行物売上	86,600	112,250	△25,650
山研使用料収益	1,279,293	2,068,570	△789,277
その他事業収益	7,682,300	1,312,440	6,369,860
受取補助金等			
受取地方公共団体補助金	95,744	0	95,744
受取地方公共団体補助金	507,000	0	507,000
受取民間助成金	413,000	0	413,000
受取助成金	6,813,117	0	6,813,117
受取寄付金			
受取寄付金	812,481	1,342,790	△530,309
受取寄付金（震災）	4,741,162	0	4,741,162
会員寄付金	1,812,263	0	1,812,263
雑収益			
受取利息	3,137	87,461	△84,324
雑収益	1,368,906	1,039,280	329,626
経常収益計	87,567,445	66,240,372	21,327,073
(2) 経常費用			
事業費			
出版事業費	13,903,674	10,600,540	3,303,134
図書管理事業費	6,963,167	161,632	6,801,535
調査研究事業費	1,065,916	2,177,649	△1,111,733
指導研究事業費	213,709	431,686	△217,977
支部事業費	12,207,036	10,406,484	1,800,552
高尾の森づくりの会事業費	4,762,788	0	4,762,788
海外事業費	102,110	166,399	△64,289
山岳研究所事業費	4,757,342	2,047,127	2,710,215

科 目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
機械装置 ミニ水力発電装置	3,816,750	2,132,606	1,684,144
合 計	173,067,147	97,508,976	75,558,171

5. 補助金等の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高

補助金等の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高は、次のとおりである。(単位:円)

補助金等の名称	交付者	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	貸借対照表上の記載区分
補助金 山の博覧会	山梨県	0	95,744	95,744	0	—
助成金 山岳環境データベース構築 助成基金	財自然保護 山梨県	0	413,000	206,984	206,016	一般正味財産
高山植物園バロール 山岳レインジャー事業 狼投の森づくり	北海道 山梨県 (公社)国土緑 化推進機構	0 0 0	414,000 93,000 599,780	414,000 93,000 599,780	0 0 0	— — —
。 〃	(公社)国土緑 化推進機構	0	1,100,000	1,100,000	0	—
県民の森づくり(岐阜)	(公社)国土緑 化推進機構	0	353,337	353,337	0	—
ラオス樹林プロジェクト	(公社)国土緑 化推進機構	0	3,000,000	3,000,000	0	—
三徳流産プロジェクト	(公社)国土緑 化推進機構	0	800,000	800,000	0	—
高尾の森づくり	(公社)国土緑 化推進機構	0	960,000	960,000	0	—
合 計		0	7,828,861	7,622,845	206,016	

6. 退職給付関係

(1)採用している退職給付制度の概要

確定給付型の制度として退職一時金制度を設けている。

(2)退職給付債務及びその内訳 (単位:円)

① 退職給付債務	△3,954,500
② 会計基準変更時差異の未処理額	0
③ 退職給付引当金 (①+②)	△3,954,500

(3)退職給付費用に関する事項 (単位:円)

① 勤務費用	318,358
② 会計基準変更時差異の費用処理額	0
③ 退職給付費用 (①+②)	318,358

(4)退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

退職給付債務の計算に当たっては、退職一時金制度に基づく期末自己都合要支給額を基礎として計算している。

7. その他

当社法人は平成24年4月1日に、公益社団法人に移行し、公益社団法人日本山岳会に名称を変更している。

附属明細書

1. 基本財産及び特定資産の明細

基本財産及び特定資産の明細については、財務諸表に対する注記2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高に記載している。

2. 引当金の明細 (単位:円)

科 目	期首残高	当期増加額	当期減少額		期末残高
			目的使用	その他	
退職給付引当金	3,986,350	318,358	350,208	0	3,954,500

財産目録

平成24年3月31日現在

(単位:円)

貸借対照表科目	場所・物量等	使用目的等	金額
(流動資産)			
現金 預金	手元保管 振替貯金	運転資金として	327,233
	ゆうちょ銀行 00130-1-4829 ゆうちょ銀行 00160-3-688239	運転資金として 〃	2,418,674 1,000,000
	普通預金		
	りそな銀行市ヶ谷支店	運転資金として	3,744,989
	三菱東京UFJ銀行市ヶ谷支店	〃	10,812,888
	中央三井信託銀行本店	〃	365,567
	みずほ銀行市ヶ谷支店	〃	415,329
	三井住友銀行飯田橋支店	〃	290,907
	三菱東京UFJ銀行新宿支店	〃	148,875

財務諸表に対する注記

1. 重要な会計方針

(1)有価証券の評価基準及び評価方法

基本財産の貸付信託は、個別法による原価法を採用している。

(2)棚卸資産の評価基準及び評価方法

貯蔵品は個別法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）によっている。

(3)固定資産の減価償却の方法

建物及び機械装置は定額法によっている。

(4)引当金の計上基準

退職給付引当金は職員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務に基づき、当期末において発生していると認められる額を計上している。

なお、退職給付債務は期末自己都合要支給額に基づいて計算している。

(5)リース会計基準適用初年度開始前の所有権移転外ファイナンス・リース取引引き続き通常の賃貸借処理に係る方法に準じた会計処理を適用している。

(6)消費税等の会計処理は税込方式によっている。

(7)当期は原則として公益法人会計基準（平成16年改正基準）を採用しているが、公益社団法人化に備えるため、一部に平成20年度基準を取り入れている。

各事業別の正味財産増減計算書内訳表と特定資産（各基金等の預金）の計上基準については、本会に備えている。

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

(単位:円)

科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
貸付信託	8,000,000	0	2,210,000	5,790,000
定期預金	0	2,210,000	0	2,210,000
小 計	8,000,000	2,210,000	2,210,000	8,000,000
特定資産				
秩父宮記念基金	15,200,000	0	0	15,200,000
海外登山基金	58,800,000	0	16,300,000	42,500,000
遭難防止事業基金	10,000,000	0	0	10,000,000
長期計画準備金	33,954,000	0	0	33,954,000
退職給付引当資産	3,986,350	318,358	350,208	3,954,500
小 計	121,940,350	318,358	16,650,208	105,608,500
合 計	129,940,350	2,528,358	18,860,208	113,608,500

(1)海外登山基金については、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律施行規則及び公益認定等ガイドラインにしたがって、当年度において、1630万円を取り崩し一般の預金に振り替えた。

(2)長期計画準備金については、上高地山岳研究所建物など本会資産の再取得または大修繕に備えるために保有するものであるが、当年度においては、利用（減少）及び積み立て（増加）は行っていない。

3. 基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりである。

(単位:円)

科 目	当期末残高	(うち指定正味財産からの充当額)	(うち一般正味財産からの充当額)	(うち負債に対応する額)
基本財産				
貸付信託	5,790,000	(5,790,000)	—	—
定期預金	2,210,000	(2,210,000)	—	—
小 計	8,000,000	(8,000,000)	—	—
特定資産				
秩父宮記念基金	15,200,000	(15,200,000)	—	—
海外登山基金	42,500,000	—	(42,500,000)	—
遭難防止事業基金	10,000,000	(10,000,000)	—	—
長期計画準備金	33,954,000	—	(33,954,000)	—
退職給付引当資産	3,954,500	—	—	(3,954,500)
小 計	105,608,500	(25,200,000)	(76,454,000)	(3,954,500)
合 計	113,608,500	(33,200,000)	(76,454,000)	(3,954,500)

4. 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。

(単位:円)

科 目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
建 物			
事務所	50,662,465	22,325,207	28,337,258
上高地山岳研究所建物	118,000,000	72,463,232	45,536,768
什器備品			
シャープ液晶ビジョン一式	587,932	587,931	1

題 名	種類・号数	作者名	掲載・保管場所
伊豆半島	油－10	茨木 猪之吉	松本アルプス山岳館
針の木峠より	油－10	茨木 猪之吉	本 会
徳本峠から穂高連峰	墨絵	石田 吟松	松本アルプス山岳館
初冬の両神山	油－10	茨木 猪之吉	本 会
鳥(カット原画)	墨絵	石井 鶴三	本 会
メールドグラス	エッチング		本 会
モンブラン	エッチング		松本アルプス山岳館
カンチェンジュンガ遠望	エッチング	シュラギントワイト	本 会
ユングフラウ	油	山里 寿男	伯耆国山岳美術館
濁沢より北穂高	水彩－6	山里 寿男	松本アルプス山岳館
初夏の槍ヶ岳	油－10	中村 清太郎	本 会
カンチェンジュンガ	バステル	矢崎 千代二	本 会
北穂高岳滝谷	油－25	足立 源一郎	本 会
或朝の槍ヶ岳	油－25	足立 源一郎	伯耆国山岳美術館
北穂高主峰	油－25	足立 源一郎	本 会
朝の槍ヶ岳	油－P8	足立 源一郎	本 会
タンボチエの僧院	水彩－4	清野 恒	松本アルプス山岳館
シェルパニの親子	水彩－4	清野 恒	松本アルプス山岳館
冬の山(清太山)	墨絵	近藤 茂吉	松本アルプス山岳館
梓川秋色	油－12	後藤 三男	本 会
早朝の上高地山岳研究所	版画－8	松田 敏男	上高地山岳研究所
旧上高地山岳研究所	水彩－10	松田 敏男	上高地山岳研究所
焼岳秋趣	版画－8	鈴木 正俊	伯耆国山岳美術館
ナムチャバルワ峰暮色	油－10	神原 忠夫	伯耆国山岳美術館
白馬雪田	日本画	丸山 晩霞	本 会
上高地秋景	油－F20	後藤 三男	上高地山岳研究所
マチャルチャレ	油－20	武井 清	本 会
朝霧	水彩－8	越智 英夫	本 会
白樺の林	油－6	茨木 猪之吉	本 会
麓春	油－P50	倉員 辰雄	本 会
ヒマラヤダーズンにて	油－F4	上野 春香	伯耆国山岳美術館
タムセルク	油－30	武井 清	本 会
安曇野の春	油－30	後藤 三男	松本アルプス山岳館
ヒマラヤの古都	油－30	藤江 幾太郎	本 会
アルバータ	油－6	レオン・アマン	本 会
ケルン	油－6	金光 義朗	上高地山岳研究所
山	油－6	辰沼 広吉	本 会
アルバータとピッケル	水彩	カナダ山岳会	本 会
題名不詳 24枚	油－10	茨木 猪之吉	本 会
題名不詳 8枚	油－6	茨木 猪之吉	本 会
題名不詳 12枚	水彩	茨木 猪之吉	本 会
スケッチブック	32冊	茨木 猪之吉	本 会
ロンブクよりエベレスト	版画	H. ソマベル	大町山岳博物館
白馬残照	版画	鈴木 正俊	本 会
穂高連峰	版画	小暮 真望	本 会
安曇野と常念岳	版画	小暮 真望	本 会
尾瀬と燧ヶ岳	版画	小暮 真望	本 会
谷川岳	版画	小暮 真望	本 会
シダゴ山 晩秋	版画	鈴木 正俊	本 会
檜洞丸山荘	版画	鈴木 正俊	本 会
世界の名山36峰ペン画集 (他の絵画、写真 省略)	ペン画	牧 潤一	本 会

2. 図 書

和 書	平成23年度受入冊数	196冊	蔵書計	12,079冊
洋 書	平成23年度受入冊数	18冊	蔵書計	3,876冊

3. フィルム・ビデオ

フィルム	15点	「マナスルに立つ」 他
ビデオ	296点	「ナンダ・コート征服」 他
D V D	67点	「エヴェレスト征服」 他

貸借対照表科目		場所・物量等	使用目的等	金額	
		三井住友銀行飯田橋支店	〃	5,000,000	
		十六銀行真砂町支店	〃	200,000	
		通常貯金			
		ゆうちょ銀行 10070-75776321	運転資金として	47,097	
		定期預金			
		三菱東京UFJ銀行新宿支店	運転資金として	4,800,000	
		みずほ銀行市ヶ谷支店	〃	4,289,000	
		三井住友銀行飯田橋支店	〃	11,300,000	
		未収会費	平成23年度以前の未収会費	6,288,000	
		未収金		62,500	
	貯蔵品	服飾品・その他	1,413,564		
	刊行物	会員へ頒布 会員・一般への頒布	672,390		
	流動資産合計			53,597,013	
	(固定資産)				
	基本財産				
特定資産	貸付信託	中央三井信託銀行本店	公益目的保有財産であり、運用益を管理業務に使用している。	5,790,000	
		〃		2,210,000	
	定期預金				
	秋父宮記念基金	定期預金	公益目的保有財産であり、秋父宮家等から寄贈された、長期間保有することにより、その運用益を秋父宮記念山岳賞の顕彰資金を支給するための基金である。	15,200,000	
	三菱東京UFJ銀行新宿支店				
	海外登山基金	定期預金	公益目的保有財産であり、日本山岳会または外部団体の海外登山の助成金支出にあてるため保有する基金である。	42,500,000	
	りそな銀行市ヶ谷支店				
	遺贈財止事業基金	定期預金	公益目的保有財産であり、会員から寄付された遺贈財止事業への助成金及び会員等の遺贈対策費用にあてるための基金である。	10,000,000	
	みずほ銀行市ヶ谷支店				
	長期計画準備金	定期預金	公益目的事業・管理業務用資産の再取得または修繕にあてるため管理されている預金である。	33,954,000	
	みずほ銀行市ヶ谷支店				
	退職給付当座資産	定期預金	職員への退職金支給に備えたもの	3,954,500	
	りそな銀行市ヶ谷支店				
	その他固定資産	土地	97.724264㎡	公益目的事業の登山振興事業、山岳研究調査事業（山岳図書館）及び公益事業と管理業務の施設として使用している。	86,737,705
			東京都千代田区四番町5番4		
建物		266.73㎡	公益目的事業の登山振興事業、山岳研究調査事業（山岳図書館）及び公益事業と管理業務の施設として使用している。	28,337,258	
東京都千代田区四番町5番4					
		274.09㎡	公益目的保有財産であり、山岳研究調査事業の施設に使用している。	45,536,768	
長野県松本市安曇4469番地1					
什器備品		シャープ液晶ビジョン一式	公益目的事業の登山振興事業、山岳研究調査事業（山岳図書館）及び公益事業と管理業務の施設として使用している。	1	
機械装置		ミニ水力発電装置	公益目的保有財産であり、山岳研究調査事業に使用している。	1,684,144	
長野県松本市安曇4469番地1					
固定資産合計			275,904,376		
資産合計			329,501,389		
(流動負債)					
前受金		会員からの前受金	平成24年度会費 9名分	104,000	
		預り金	支部からの預り金他	ルーム取得資金として 支部からの預り金他	10,612,227
流動負債合計			10,716,227		
(固定負債)					
退職給付引当金	職員に対するもの	職員に対する退職金の支払いに備えたもの	3,954,500		
固定負債合計			3,954,500		
負債合計			14,670,727		
正味財産			314,830,662		

財産目録記載外のその他物品リスト

1. 絵画

題 名	種類・号数	作者名	掲載・保管場所
シュラギントワイト・アトラス	リトグラフ	シュラギントワイト兄弟	本 会
白馬岳	油－A50	中村 清太郎	大町山岳博物館
富士山麓	油－A25	茨木 猪之吉	河口湖町立美術館
田代池の白樺	油変形－6	中村 清太郎	本 会
群猿	墨絵	石井 鶴三	本 会

トビックス

竹内洋岳さん、ダウラギリ登頂。
8000¹峰14座コンプリート

5月26日、プロ登山家の竹内洋岳さんがダウラギリ(8167¹)に登った。これにより竹内さんは8000¹峰14座すべてに登頂し、日本人初の記録を作った。

竹内さんの最初の8000¹峰は、1995年のマカルー東稜。日本山岳会隊に参加。下部は初登攀であり、長く厳しい登山だった。翌年にはエベレスト、K2に立つづけに登頂。

転機となったのは、2001年のナンガ・パルバット。ドイツ人登山家ラルフ・ドワイモビッツさんがオーガナイズする公募隊に参加したことが、以後の竹内さんの登山に大きく影響した。以来、ラルフさんやオーストリア人女性のガリンダ・カールセンブラウナーさんが主だったパートナーとなり、日本人に限らず各国のクライマーとチームを組みながら、少人数で、酸素ボンベやシエルパを使用しないなるべくシンプルなスタイルでのヒマラヤ登山を続けた。

06年もまた、振り返ると節目の

年であった。3月に「プロ宣言」をする。さらに6座の8000¹峰に登って、14座をコンプリートすると記者会見で語ったのだ。プロ登山家というのは、いったいどのようなものなのか、集まったマスコミ陣の理解はおそらく浅かっただろうし、山仲間たちにも伝わりにくかったかのではないだろうか。しかしひよつとしたら、伝わりにくかったのはいわゆる登山界だけであり、一般社会にはすんなりと、「プロの登山家というのがあるのか」と受け入れられたのかもしれない。

プロ宣言をした翌年夏のガツシャブルムII峰で、大規模な雪崩に巻き込まれ、九死に一生を得た。腰椎破裂骨折の重傷を負い生命の危機に陥ったが、居合わせた各国の登山隊が協力しレスキューをしてくれたこともあり、奇跡的に生還。このときのことを竹内さんは「山で新たな生命を与えられた」というが、まさに死の縁をさまよいながら、各国の登山者、その後の

山仲間や医師たちが命のリレーをし、彼を救った。事故当時、登山への復帰の道程を見据えていたのは、竹内さん本人だけだったのかもしれない。それほど深刻なケガだった。筆者は、帰国直後に病院で面会したさいに、早くも彼が来年の登山、次の山について語るのを聞き、その表情に驚いたことをよく覚えていいる。人生を変えるような大きなことや、一生を左右するような出来事があると、人の顔というのは変わるのだと、思った。到底先が見えないようななか、竹内さんは手術後にリハビリを続け、翌年にはガツシャブルムII峰に戻った。

これまで日本には14座を目前にし、10座目で命を落とした登山家が3人いた。「10座目の壁」と言われたジンクスに、竹内さん自身も足をすくわれながらも、自ら這い上がった。

08年のガツシャブルムII峰登頂のあとは継続して、ブロードピークにも登頂。その後、ローツェ、チョ・オユーに登頂し、今年が14座目のダウラギリとなったのだ。パートナーは、チョ・オユーから一緒に登っている中島ケンロウさ

ん。中島さんは竹内さんの登山を記録するために、スチールカメラとビデオカメラも持参した。

ダウラギリは、ベースキャンプからキャンプ1までのルート上に、落石や雪崩による外的危険がとても多い。そのため、ふたりはアイランドピークで高所順応をすることにした。アイランドピークは各国の公募隊でにぎわう山であるが、彼らはフィックスロープの脇をぐいぐいと登り、6160¹の山頂にテントを張って1泊。これを高所順応活動とした。

その後カトマンズに戻り休養したのち、ヘリコプターでダウラギリBCに入る。悪路通過は最低限にしようと、高所順応はC2ステイ、その際に6800¹付近までタッチした1回に限られた。その後、BCで休養と天候待ちをし、サミットプッシュに入る。

順調にC1、C2と進むが、C2上部で、高所順応が不十分であった中島さんは下山。C1で竹内さんの帰還を待つことになった。

C2からはひとりとなった竹内さんであるが、同日にサミットプッシュを予定していたチームがもうひとつあった。アメリカ人女

性（酸素ボンベ使用）とシェルパのふたり組だ。25日未明、C3からひとりで山頂へ向かった。ラッセルに苦しめられ、なかなか先へ進まなかったが、やがてアメリカ人女性達が追いつき、ラッセルを交代。結果、彼らは竹内さんより1〜2時間ほど早く登頂し下降。ダウラギリの山頂は、竹内さんひとりとなった。

強風吹きすさぶなか、山頂の岩稜部に達した。衛星電話を使って音声メッセージをブログにアップしようと試みたが、電波が入らなかったため、すぐに下山。ルンゼに入って風をよけると、無線が通じ、BCへ登頂を報せた。

C3から山頂まで17時間を要しており、すでにときは遅かった。暗闇でいよいよ下降ルートが定かでなくなったところ、竹内さんはビバークを決める。標高7520m地点、過去の登山隊がC4として使った跡地だった。

この時の模様は、竹内さんのブログ（<http://weblog.hochi.co.jp/takeuchi/>）で逐一見ることができた。BCを経由して日本に届く情報アップされたからだ。また竹内さんが、スポットというGPS

機能を用いて現在地情報を即時にネット上に表示できる端末を持参していたため、彼の現在地がつねに、ブログにあるグーグルマップ上に記されていた。

スポットの動きがびたりと止まり、ビバークに入ることがBC経由でブログにアップされ、見る側には緊張感が走った。しかし当の本人はそれほど危機感があつたわけではない。「思いのほか、暖かかったんです」と語っていた。また、中島さんがC1で待機していることも大きなサポートとなった。全体的には暖かく感じていた気温も、夜中になると冷え込む。岩陰でのビバークであつたが、ときおり襲ってくる地吹雪に、竹内さんはひとり「バカヤロー」と叫び、気を紛らわしていた。温かっただけのテルモスのポカリスエットは凍りつき、水分を取ることもできなかった。

27日あたりが白み始めた頃、下山を再開。中島さんもC1から駆け上がるように、上部を目指していた。竹内さんはC3で仮眠を取り、その後C3下部にて中島さんと合流。一気にBCまで下山した。

*

ところで、竹内さんの登山はダウラギリで終わったわけではない。ヒマラヤ登山の愉しさを知り、大好きなヒマラヤに登り続けた結果であり、ひとつの通過点に過ぎなかった。いつものように、頂上を後にし下りながら、次の山を考ええた。数年前マナスルに登頂したおり、マナスル初登頂隊のメンバーである日下田實さんと対談し、下山中に何を考えるかという話で、ふたりは「次なる山」にほかならなと一致した話が弾んでいた。山が好きで人というものは、そういうものだ。BCに下りてきて、カトマンズで装備の後片付けをしながら竹内さんは来年のヒマラヤ登山について考えていた。

一方で、プロ登山家としては今後どのような活動を展開していくのだろうか。06年のプロ宣言で、竹内さんはいわば、後戻りできないところへと自分を追い込んだ。本人曰く「這いつくばってでも登る覚悟」だったという。

自分の登山を自身の範囲にとどめず、社会への波及を考えた。登山という文化、スポーツが日本に根づいてほしいというのが、竹内さんの考えていることだ。

ダウラギリ後に開催されたカトマンズツアーはその布石だったのかもしれない。長年ヒマラヤ登山に通いながらも、彼ほどネパールに詳しい人は少ない。歴史にも現代的テーマにも精通していた。参加者たちは竹内さんに接するなかで、大いなるインスピレーションを受けていた。彼らの今後の登山もそして人生も変えてしまうのではないかと、というほど竹内さんの個性は強烈であり、みなが自分を見つめる機会となったようだ。

プロ登山家というのは自身が山に登り、それを表現でき、さらにはこうやって他者に影響を与えられる人なのだと、その凄さをまざまざと見た。

竹内さんは「たった14の山に登っただけ、ほかにもいい山はたくさんあります」と言う。彼の好奇心や山への思いが積み重ねられ、社会へ向けた表現活動にもなっていく。竹内さんのプロ登山家としての活動は始まったばかりなのかもしれない。これからがますます楽しみです。

（柏澄子）

竹内さん、中島さんとも当会会員ではありませんが、このたびの登山を読者の皆さんにもお伝えしたく、記事を作りました。

トピックス

第32回日本登山医学会学術集会

6月16～17日に福岡県福岡市で、第32回日本登山医学会学術集会(斉藤篤司会長)が開催された。

16日のシンポジウム1「登山における3低条件下の運動生理」では、「低圧低酸素」、「低温」、「低エネルギー」への対処方法を浅野勝己先生、小野寺昇先生、山本正嘉先生がそれぞれわかりやすく説明してくれた。

同日昼前の特別講演では鈴井正敏先生が「運動が免疫を司るナチュラル・キラー細胞に与える影響」について説明してくれた。

午後の教育講演では根上優先生が「現代登山事情を斬る」という講演を行なった。

17日のシンポジウム2「高山病になる人ならない人」では、山本武巳先生が低酸素曝露時にアルドステロン分泌量の増加する人は急性高山病になりやすいとの発表、また高所順応の指標として夜間の尿量とpHの測定を推奨し、野口いづみ先生はマウスピースの使用が高所での夜間睡眠時無呼吸を軽症化する可能性について言及、安

藤隼人先生は常圧低酸素室で安全に低酸素トレーニングができることを説明された。

また、斉藤会長自ら演者となった16日のランチョンセミナーでは、プレハイドレーションの有効性につき説明してくれた。

上記の講演は非常に専門的かつ実践的な情報を提供してくれたが、一般演題のよいところは、終了後に若い演者とディスカッションができることである。自然科学に対する興味を共有する者同士の話し合いは、非常に楽しいひとときを提供してくれた。

学術集会の詳細について情報を得たい方は、来年初めに刊行される日本登山医学会誌「登山医学」32号のご購入を。来年開催の第33回学術集会でも購入可能です。

(上小牧憲寛)

二日目午後には登山を愛好する一般市民を対象に市民公開講座が行なわれた。比較的大きな会場であったにも関わらず満席に近いように見えた。

今回の公開講座のテーマは「登

山医学を登山者に還元する——登山Q&A」であり、以下のセッションが行なわれた。

①登山と生活習慣病との関わり

アジア高地での研究が専門の奥宮清人氏(総合地球環境学研究所)より、糖尿病や高血圧を抱えている中高年者が登山する場合の注意点、登山による生活習慣の改善などについて解説がなされた。また、氏自身の研究テーマであるヒマラヤ高地住民の生活習慣の変化に伴う生活習慣病の増加とその対応についても併せて紹介された。

②山を快適に歩く

講師は数々の著作がある柏澄子氏。ゆつくり歩き始めること、歩く姿勢や体重移動の注意、休憩や水分、食事のとりかた、登山靴の選び方など、実際の有益な解説がなされた。

③登山と腰痛・膝痛

整形外科専門医の北野喜行氏が、登山における腰痛・膝痛について解説。骨盤コルセット、機能性タイツ、膝サポーター、足底版の使い方を工夫し、ストックはダブルで使うなど、自身が高齢となり登山による腰痛・膝痛の経験に基づいた実践的な講話であった。な

お、骨盤コルセットは処方に基づくとオーダーメイドとのこと。

④5月GW北アルプスでの遭難を考える——低体温症、その時ができるか

福岡県の登山者7名が、今年5月4日に白馬や穂高で遭難死した事故をうけ、低温環境の登山を研究している小野寺昇氏(川崎医療福祉大学)の司会のもと緊急に開催された。

まず、今年のGWの気象状況と当日も含めた事故前後の白馬岳の様子が示され、二つ玉低気圧の通過があったものの、登山口では晴天であり薄着で汗をかきながら登る状況だったことが明らかにされた。次いで、穂高の事故の生存者の稲永雅利氏が、ビバーク中に低体温症にて意識を失っていく生々しい証言があった。一方、稲永氏のパーティの救助にあたった穂高岳山荘の宮田八郎氏から、短時間で低体温症が進行し要救助者が意識を失っていく様子や、吹雪の夜間、岩稜地帯での緊迫した救助活動の報告もなされた。最後に国際認定山岳医である梶谷博より、低体温症の病態と対応についての講義があった。

(梶谷博)

イベント報告

国際山岳年プラス10シンポジウム
「みんなで山を考えよう」報告

02年国際山岳年(IYM)から10年が経過したいま、6月23・24日に国際山岳年プラス10シンポジウム「みんなで山を考えよう」が日本大学文理学部において実施された。

23日は、学部長の歓迎あいさつ、田部井淳子実行委員長(元IYM日本委員会委員長)のビデオメッセージ、梁洛輝博士(国連大)のあいさつで始まった。シンポジウムの第1セッション(変化する社会と山岳住民の適応)では、ヘルマン・クロイツマン(ベルリン自由大)が、ヒマラヤからパミールに至る地域の諸問題について外観し、落合康浩・水嶋一雄(日大)は、パミールからカラコラムにかけてのワヒ民族の社会変化を紹介。白坂蕃(帝京大)は中国・雲南省における焼畑の衰退とゴム栽培への移行について述べた。渡辺和之(立命館大)はネパール・ヒマラヤの移牧のダイナミズムを論じた。

森次郎(平成帝京大)がJICAとJSTによるブータン王国の氷河湖決壊洪水プロジェクトの報告。檜垣大助(弘前大)はネパールとブータンでの長期滞在経験に基づき、水に起因した災害にもっと若い人が興味をもつよう訴えた。藁谷哲也(日大)はカラコラム・ハイウェイを遮断した大規模崩壊発生の際の動画を紹介したのち、ダム湖の発達について論じた。

24日は、第3セッション(災害と山の生活——東日本大震災を中心に)。田口洋美(東北芸術工科大)は、人口減少時代がもたらす問題を受け止めることの重要性について述べた。和泉功(福島登高会)は、山の放射能汚染が登山活動に悪影響を与えているが、多くのデータから東北の山が危険ではないと述べた。宮地忠幸(国士館大)は、原発の被害に苦しむ阿武隈高地の農村の復興への若者(学生)の力に期待を寄せた。飯田肇(立山カルデラ砂防博物館)は、豪雨がもたらす土石流や土砂崩れについて紹介

し、3・11の地震によって「山」が緩んでいることを指摘。

第4セッション(山と人と安全)はふたつの基調講演があった。村越真(静岡大)は、山岳遭難データには登山者数に加えて山菜採りの人の数が含まれていることに注意し、そのうえで登山者についての分析を行なう必要があることを強調した。山本正嘉(鹿屋体育大)は、中高年登山者の体力の弱点が脚力と心肺能力にあることを指摘し、これらを改善しなければ事故の軽減にはつながらないと述べた。

第5セッション(山の自然保護——問題点とこれから)では、泉山茂之(信州大)がシカの行動圏を示し、シカが高山帯の生態系に大きな影響を与えていると述べた。トム・ジョーンズ(明治大)は、外国人登山者が増加の傾向にあり、日本には「外国人の目線」にたった対応がないことを指摘した。佐野充(日大)は富士山の世界遺産登録に向けた1994年以降の活動を紹介した。椎名宏子(東京都山岳連盟・NPO尾瀬自然保護ネットワーク)は至仏山東面登山道、シカ、移入種、管理問題を取りあげた。穂刈康治(槍ヶ岳観光)は、登

山道の維持管理とトイレの改善について述べた。愛甲哲也(北大)は、環境省が議論している自然公園における施設整備について紹介。

最後に渡辺悌二(北大)が総括し、成川隆頭が「山の日」制定に向けた活動について述べ、シンポジウム実行委員長・吉野正敏(筑波大名誉教授・元IYM日本委員会特別顧問)のあいさつで閉会。

またHATJとカトマンズのICIMODがヒマラヤの写真パネルを提供し、「ヒマラヤ——変わりゆく景観」展を2日間にわたって開いた。

(渡辺悌二)

東北 南北

尾瀬の国有化を積極的に

田村義彦

『山』5月(804)号の「会務報告」を読んで、山岳6団体で環境大臣へ尾瀬国有化の意見書を提出することが理事会で承認されたことを知りました。

要望書の全文は掲載されていませんが、「東電が尾瀬を売却する際には国有化を要望するもの」と要約されています。しかし、筆者の結論を先に言えば、東電が尾瀬を売却するしないにかかわらず、この際、国は国有化すべきであると考えます。従来、国は尾瀬を国立公園に指定するだけで、維持管理の多くを東電の負担に頼ってきたことは広く知られています。それは国の責任放棄であり、一方、東電は経費負担を企業のイメージアップに利用してきました。

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

しかし、環境省は尾瀬の重要性を再確認して、2007年に隣接する日光国立公園から分離独立させました。評価すべきですが、尾瀬国立公園全体の約4割、特別保護地区の約7割の土地を一企業である東電が所有する形は依然変わらず、維持管理を東電にすぎる姿勢も変わりませんでした。国が土地を所有し、自らの理念に基いて保護行政を行なう形とはほど遠いものでした。

ところで、昭和40年代に、紀伊半島の吉野熊野国立公園大台ヶ原地区においては、皆伐の危機にひんしたブナの原生林を守るために、官民一体の運動が盛り上がりました。その成果として、いわゆる「民有地買上措置」が新たに発せられて、ブナの原生林が国費で買上げられ、保護されました。その地域は、先年、わが国最初の利用調整地区に指定され、先進的な運用

が行なわれています。

40年前に創出された「民有地買上措置」は今でも生きていて、毎年予算がついています。その措置を使って、東電の売却の意志いかんにかかわらず、積極的に尾瀬の国有化を図るべき時だと考えます。筆者が属する自然保護団体は、前記の大台ヶ原買上運動の中心になった経験から、昨年6月と9月に国有化の要望書を内閣総理大臣、環境大臣等宛に提出しました。

9月8日には、尾上昇日本山岳会会長、大船武彦自然保護委員長宛に日本山岳会として国有化へ尽力いただきたいと、再度要請しました。この件は、理事会では報告されたようですが、明確な意思表明には至らなかったようで、返事はいただけませんでした。また、自然保護全国集会の資料にもこの動きは掲載されていないので、日本山岳会としては買上問題を看過するのかと理解していました。それだけに、このたびの突然の意見書提出には驚きました。

しかし、6団体との共同行動で、しかも「尾瀬を売却する際には」などと及び腰であります。たとえ定款から「自然保護」を削除した会と

はいえ、積極的に国有化のリーダーシップをとってほしいと願います。それが本会の先人の心を今に生かす道だと信じます。



活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

山研運営委員会

徳本峠越えとウエストン祭

『山』4月(803)号、「徳本峠越えとウエストン祭」を見て申し込んだ。実は、長年登山を楽しんできたが、まだ徳本峠を越えたことがなかった。今年こそ「絶対に越えてみせる」と決心したものの、後期高齢者になることを考えると、単独行は心配で迷っていた。そんな私にとって、これは「渡りに船」。最近入会した2人も誘って、一緒に参加した。

6月2日、東京からの夜行バスで島々宿へ。ここで信濃支部会員による茶・菓子の接待を受け、持参した弁当で朝食をすませた。出発式の後、総勢15名の「山研隊」は、リーダー大槻さん、サブリーダー森さんに率いられ、6時15分出発。この日、徳本峠に向かうのは200人にも達するとのこと。信濃支

部のパトロール(随登)隊のなかには医師もいて、高齢者には心強く感じた。

二俣からは島々谷南沢に沿った登山道となり、緑林を通して降り注ぐ木漏れ日を浴びながら黙々と歩く。徒渉箇所が多く、真新しい丸木にステップを刻んだ鉦の跡、アルミの梯子などが多くなる。この日のために関係者が整備してくれたようだ。予定より早い10時5分、岩魚留小屋に着く。その昔、多くの新人たちがここで涙を拭い、身体を休めたことであろう。この古い小屋の中から、「景色なんぞは夢のうち」という歌が聞こえてくるように思えた。

岩魚留小屋からさらに急坂になる。峠からの眺望を想像しながら、休むたびに「小屋から3分の1登った、いやもう半分は来た」と自らを励ましなが、一步一步高度を上げていく。最後の水場「力



岩魚留小屋に到着した15名の「山研隊」

水」で沢と別れ、ニリンソウが群生するジグザグ道を登ると残雪が現われた。やがて木々の間から青空が見え、頭の上から人の声が聞こえてきた。

13時25分、念願の「徳本峠」にたどり着く。目の前に明神や穂高連山の姿が見えた。これぞウエストンが涙を流し、多くの岳人を感じさせた眺めなのだ！ 峠で大休止、各自思い思いの喜びを胸に秘め、この「兵どもが夢の跡」を後にした。

峠付近の残雪に注意し、満開のニリンソウで敷き詰められた白沢出合を通り、15時5分、明神に着いた。「徳本峠越え」の感激の余韻をかみしめながら、三々五々、宿で

ある山研へと向かった。

山研では、信濃支部会員、運営委員、管理人の方々による心尽くしの料理に舌鼓を打ち、初対面同士で山談義が始まった。宴もたけなわの頃、尾上会長をはじめ幹部の方々が加わり、ますます盛り上った。誰が会長で、誰が新会員かわからぬほど打ち解けあい、楽しいひと時であった。

3日10時、第66回ウエストン祭に参加。第1部は、信濃支部長のあいさつ、献花、安曇野小学校生徒による合唱・器楽演奏、黙祷、尾上会長・松本市副市長あいさつ、尾崎喜八の詩の朗読と続き、ウエストンの偉業を称えあった。

第2部は、尾上会長の講演。「ウエストンさんのおき土産」と題し、ウエストンの紹介と、在日中の日記などからエピソードをお話いただいた。続いて、西糸屋で「午餐会」が催され、各支部の方々と懇親を深めることができた。

信濃支部の方々はじめ、山研運営委員や関係者の皆さんに大変お世話になり、心より感謝の意を表します。この行事を毎年続けておられることに、ただただ頭が下がります。思いです。

(岡義雄)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

越後支部

平成24年度総会と親睦登山

5月26日に越後支部総会が、長岡市栃尾栃堀の刈谷田川ニューホテルを会場にして開催された。守門山麓刈谷田川上流の刈谷田川ダムを望み、また山の新緑が最盛の時期であった。出席者40名と委任状135名、総会議決数175(支部会員80名)であった。

14時開会、山崎幸和支部長から公益法人移行の経過・状況説明がなされた。引き続き、平成23年度の活動報告・会計報告と平成24年度の活動方針と予算説明等が承認された。また、公益法人としての支部規約や内規等の重要事項の審議も異議なく承認。16時、橋本副支部長の閉会のあいさつをもって終了した。

総会終了後、16時15分から記念講演を行なった。講演者は深滝純

一氏(栃尾郷土史研究家)で、「守門山麓と栃尾について」講話していただいた。講演にあたり、守門岳を語る際に重要な人物として、元支部会員であった故稲田豊八氏や、故佐藤金一氏に関する資料が配布された。また、日本山岳会元副会長・故深田久弥氏の『100名山以外の名山50』(河出書房)の資料も配布された。さらに、深田氏が3月の守門岳に登られたとき「雪の砂漠」と形容し、「東洋一の大雪庇」と称賛した登山紀行文も配布された。守門岳は六十里と八十里越に挟まれた位置にある。その歴史的経緯の話から、栃尾秋葉三尺坊神社、地元伝説の静御前の墓や二田池大蛇等の話にまでおよび、興味津々で聞きいった。

その後、席を移しての懇親会。翌日の親睦登山統括リーダー・本間宏之副支部長の乾杯の音頭で開宴し、越後岳人の交流サロンとし



東洋一と称される大雪庇を背に。後方は守門連山

て旧交を温めた。

翌27日は、晴天に恵まれ絶好の登山日和となった。朝早の散歩や登山の準備などとして、計画より早い7時30分にマイクロバスで宿舎を出発した。保久礼登山口まで舗装された林道が続く、すでに多数のマイカーが駐車し登山者で賑わっていた。また、地元栃堀区の方々が味噌汁のサービスで歓迎。コースリーダーの浅野巨寛会員から、本日のルート説明を受け、8時、順次出発した。保久礼から階段状に整備された急坂の登山道がしばらく続き、ブナの自然林の中を一気に高度を稼ぐことができた。9時、キビタキ小屋(1050m)に着。こ

の付近から登山道に残雪が現われ始めた。さらに30分ほどで不動平(1268m)着。この付近から森林限界となり視界が開けた。残雪を踏みしめ、薫風の中で周囲の展望を楽しみながら快適に登ることができた。頂上の鐘の音が聞こえ、頂上が近いと感じる。

10時、守門大岳(1432m)頂上着。頂上には巣守神社石祠と吊鐘が設置されている。石祠と吊鐘のことは、深田氏の登山紀行文にも書かれている。さらに少し歩いて頂上雪稜部に出て大休止、昼食をとりながら越後平野と360度

の展望を満喫した。雪稜部の先は雪庇となつている。雪庇はかなり融け落ちており、深田氏が称賛した「東洋一の大雪庇」は、3月後半から4月半ばまでが見ごろなのだろう。雪稜線は守門連山の青雲岳(1487^メ)から主峰袴岳(1538^メ)へとスカイラインが延びている。

11時から、栃尾観光協会主催の山開き安全祈願祭が、頂上巢守神社祠前で執り行なわれた。日本山岳会越後支部を代表して山崎支部長、この日の最高齢登山者の坂井厚支部名誉会員(84歳)が指名され、玉ぐし奉納を行なった。続いて、参加者全員で雪庇を背景に記念撮影。11時30分、下山開始。13時、全員が保久礼登山口に到着した。ブナの自然林から湧き出る清水で登山の労を癒し、迎えのマイクロボスに乗り込み、14時、無事解散となった。

(桐生恒治)

東九州支部

韓国山岳会蔚山支部との交流登山

昨年は、当支部が韓国本土最高峰の智異山を訪れて一緒に登山。



登山日和となった由布岳山頂にて

今年は、当支部が迎えて一緒に登る番だ。韓国山岳会蔚山支部との交流は8回目。そして、初回の交流で申し合わせて始まった相互訪問登山は7回目を迎える。事前に話し合つてセツトした山は、大分の名山由布岳と、泉都別府のシンの鶴見岳だ。

5月25日、昼に福岡に着いた一行は、宇佐八幡宮と安心院の東権屋の滝を観光して別府のホテルに着く。一行16名を迎え、早速、別府市内で歓迎の懇親会。集まった東九州支部会員は23名。1年ぶりの再会を祝して乾杯。『アリラン』や『坊がつる讃歌』が、ハンゲル・日本語混成で飛び出す。和やかに、

賑やかに宴は進み、あつという間の3時間であった。

翌26日は由布岳へ。過去、訪れたメンバーが、盆地から見上げる由布岳を見て一度登りたいと言つていた山だ。天気は薄曇りの高曇り。降らず照らずの最高の登山日和だ。南登山口から出発し、まず西峰へ。ちょうど見頃と期待していたミヤマキリシマだが、春先の寒波のせいか山頂付近はまだ蕾だった。山頂では、支部員の1人が担ぎ上げた大きなスィカに歓声がある。昼食後、火口壁の難路を通る「お鉢廻り」で東峰へ。そして下山は、日向越を経て南登山口へと「周回コース」で由布岳に堪能する。

27日、鶴見岳から伽藍岳への「北尾根縦走」だ。この日は朝から雲ひとつない快晴。鳥居登山口からまずは権現社へ。そして一路鶴見岳山頂へ。約2時間で到着。ロープウェイで登ってきた皆さんの観光客は、大勢の日韓混成登山隊に驚いていた。この山頂もミヤマキリシマは三分咲きていどだが、高度を下げるにつれ開き具合がすすみ、山肌のピンク色の色合いは濃くなっていく。

鞍ヶ戸のアップダウンから、船底、内山へ、さらに大きく下つて塚原越から伽藍岳へと足を延ばし、塚原温泉へは15時過ぎに下山。鶴見岳山頂から伽藍岳まで終始左手には前日登った由布岳、右手には別府市街地と別府湾を見下ろしながら、変化に富んだ縦走路に大満足の一行だった。

下山後、塚原温泉前広場でお別れセレモニー。双方の支部小旗にサインをして交換、来年は韓国での再会を約束した。一行は翌日、杵築と由布院を観光して福岡港から帰国の途についた。(飯田勝之)

北九州支部

英彦山清掃登山と山の日制定の呼びかけ

5月26日、北九州支部では、霊峰英彦山(1200m)の清掃登山と、山の日制定の呼びかけを行なった。清掃登山は、毎年支部の行事として実施しており、当日は、北九州支部が公益社団法人となつて、初めての公益事業として実施したもの。

北九州支部会員22人が3コースに分かれ山頂をめざした。途中、ゴミを拾いながら、また登山者や観光客に山の日制定パンフレットなどを配布、呼び掛けを行なった。正午、英彦山神宮がある山頂に集合。昼食後、展望台直下のがけ下にザイルを張ってゴミの搜索をしたところ、昨年に続いて、あるわ、あるわ……。掘れば掘るほど出てくるゴミ、それもビン類や朽ち果てたカン類が多い。

とくに、山頂展望台正面直下には過去のゴミが堆積しており、今回だけでも一升瓶が十数本、そのほかビール瓶、ウイスキー瓶、古い空き缶など多数回収(町指定のゴミ袋で燃えるゴミ13袋、燃えない



霊峰英彦山の清掃登山に参加したメンバー

いゴミ28袋、計41袋)。個人の運搬重量には限度があるため、今回はこれで打ち切りとした。山頂の周囲には、相当量の燃えないゴミがある。昨年は酒トックリを発見回収したが、今年は酒が入った一升瓶を回収した。しかも栓がされ、封が切られていなかった。これは何を意味するのだろうか。

本年3月、地元添田町の町長が、町議会の施政方針演説で、英彦山の世界遺産登録を目指す構想を明らかにした(読売新聞報道)。ところが、山頂には神宮があるのに、いまだ観光客や登山者のためのトイレが設置されていない。一時、簡易な垂れ流しトイレがあったが撤

去された。

いまや英彦山はかつての富士山の二の舞になっている状況であり、このままでは絶対、世界遺産登録は夢のまた夢と思われる。そのため現在、山の団体や自然保護団体などで「英彦山の環境・トイレを考える連絡協議会」を発足させ、英彦山の上部にトイレを建設しようという運動を進めている。しかし、トイレ管理の問題、山頂は神域であることなどの問題で、なかなか進展しないのが現状である。

当日は、英彦山の山開き前夜祭であり、下山後、キャンプ場での前夜祭に参加。翌日は、山頂での山開き安全祈願祭にも参加した。

今回、一般参加者に配布した資料(①英彦山上部にトイレ建設を要望する請願書の写し、②山のトイレ、環境を考える福岡協議会作成のパンフレット、③マナービニール袋、④「山の日」制定協議会のパンフレット)は250枚ほどで、トイレ建設や山の日制定を呼びかけた。

(伊藤久次郎)

日本山岳会団体傷害保険 加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

東京海上日動火災グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東京
団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail: a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809

「入会申込書」の書式変更について

これまでB5判2ページだった「入会申込書」の書式をA4判サイズの1ページにあらためました。

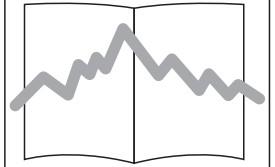
・新しい「入会申込書」は、当会ホームページからダウンロードができます。

〈会員ページ〉の〈書式集〉もしくはトップページから〈入会について〉をクリックしてください。

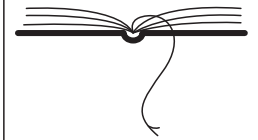
・従来通り事務局にご請求いただいても結構です。

・従来のB5判「入会申込書」も当面利用できますが、近々廃止の予定です。

(総務担当理事)

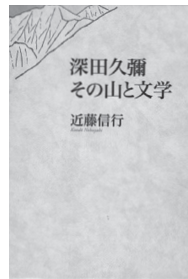


図書紹介



『深田久彌 その山と文学』

近藤信行・著



2011年12月
平凡社刊 270頁
四六判 定価 2940円

深田久彌没後、40年を過ぎた。昨今「百名山」が独り歩きしているようで、ほかの業績はわきにおき忘れられてしまった感がある、といったら言い過ぎだろうか。

『深田久彌・山の文学全集』と『深田久弥 山の文庫』（共に朝日新聞社刊）の編集にたずさわった近藤信行氏が、折にふれて執筆した深田についての文章7篇と、全集版に付した解説文をあわせて1冊にしたもの。

深田は文壇作家としてスタートした。

初期には、私小説風の作品も書

いている。その後、私生活上のいきさつも関係して、次第に山の世界にのめり込んでいく。山に登ることともに、山についての研究も始めた。その対象は、国内の山からヒマラヤへと広がっていった。その成果は精力的に発表されたが、「百名山」が生まれたのもその過程においてだ。

登山の面でも大きな働きをしている。とくにヒマラヤに関しては、深田の研究と知識が日本のヒマラヤ登山を強くあと押ししたことを忘れてはなるまい。

近藤氏は「あとがき」で、深田の伝記を書くこととしていたことが本書刊行のきっかけだったと述べているが、個人的にも親しい交友のあった著者は、深田の人と文学が何であったのか、その全体像を改めて提示することが自分に与えられた課題ととらえているようだ。その意味で、本書も深田の生涯を

つうじた業績をふりかえる内容になっている。

読んでみると、いくつかのフレーズが、あたかも通奏低音のごとく繰り返されることに気づくが、リフレインのバリエーションから浮かび上がってくるものをおして、著者の深田理解の消息を探ることができるよう思う。

キーワードのひとつは「文学者の目を通して眺めた山」だろう。深田はまず第一に文学者であった。それと同時に、山がしんそこ好きであった。このふたつが軸となつて互いに収斂していく中で、山の文学者・深田久彌の営為が展開していったのだ。

著者の、深田作品に対する造詣と、深田個人に対する敬愛の念とにうらうちされた本書は、「山のよいうな人間にならねばならぬ、山のような文章が書けるようにならねばならぬ」と思いつづけた深田久彌の山と文学の世界へみちびく恰好の道しるべとなっている。

（飯田年穂）

『垂壁のかなたへ』

ステイヴ・ハウス・著
海津正彦・訳



2012年5月
白水社刊 390頁
四六判 定価 3045円

筆者は、ヴィンス・アンダーソンとのナンガ・パルバット・ルパール壁中央ピラー登攀で、2005年にピオレドール賞を受賞した。本書には、その1988〜2008年の登攀について、考え方や行動、パートナーとのやり取りが書かれている。

筆者は、最近クライミングを始めた私にとって遙かかなた、雲の上の存在だ。だから身体的・技術的そして精神的にも強靱、不注意によるミスなどほとんどないだろうと思っていた。だが意外にも、試行錯誤や失敗、辛い気持ちなどが記述されていて、やはり同じ人間なんだと、当たり前のことに感動しながら読んだ。

個人的な話になるが、リードで登るときに落ちるのではないかと、緊張感や恐怖心で身体がガチガチになり上手く動けないことがよく

ある。トップロープならば簡単にクリアできるのに、行けない。恐怖心をどのように克服すればいいのか……。その答えが本書に書かれていないかと期待しながら読んでいたら、次の文章があった。

「恐怖心を素直に受け入れて、やり過ごし、パニックに陥るな、と経験から学んだ。いったんそれが身につくと、わたしは力強い何かを得た。自信を持って行動できるようにになった」

なるほど。難しそうだけれどそれを頭に入れて取り組んでみよう。さらに次の文章が目に残まる。

「自分がどうしてクライミングをするのか、その理由をほかの人にそして自分自身に明らかにしたかったからだ」

筆者と自分を比べるにはおこがましいレベルだが、私は何が面白くてクライミングをやっているのだろうか？

それは、緊張感のなかで自分自身と向き合わざるを得ない状況に自分を追い込むのが辛くもあり楽しくもあるからだろうか……。本書を読んでそんなことを考えた。

(大島 崇)

『北の花名山ガイド』

梅沢俊・著



2012年5月
北海道新聞社刊
A5判 240頁
定価 1890円

北海道の山の魅力は原始の香りが残っていることと、高山植物の豊富さにある。

著者は、『夏山ガイド』シリーズや『新北海道の花』など、多くの著書をもつ。

本書は、北海道の代表的な花の名山を紹介したものだが、読み物としても楽しい。それもそのはず、「たまには愛しい庭からとびだして、野生の花が持つ息吹を楽しんで欲しい」との願いをこめて『花新聞ほっかいどう』に、道北の利尻山から道南の大千軒岳まで45山を連載した。それをもつと活用してもらいたいと加筆、写真も追加して1冊にまとめたのが本書だ。

3章からなり、1章は中央高地・道北・道東の山。2章は増毛・樺戸・夕張・日高の山。3章は道央・道南の山の「花の楽園」となっている。45山の季節ごとの花の見所、交通アクセス、詳細コースマップも

ある。こんなに親切に紹介してあると、盗掘されないかと心配になる。

私と梅沢さんとの出会いは十数年前。夕張岳やアポイ岳、太平山などで大量の高山植物が盗掘されたのを機に、北海道高山植物盗掘防止ネットワークが発足。全道各地の山岳団体や市民団体が結束しようと立ち上がった時だった。

日本山岳会北海道支部も加わった。梅沢さんは全道の山をくまなく歩いて、高山植物がなくなっていく現状を誰よりも知っていた。毎年開催される「高山植物をいつまでも」市民フォーラムでは、梅沢さんの素晴らしい花のスライドと軽妙な語りが魅力で、たくさんの方が会場を埋める。

本書を開いて、まず選りすぐりの写真の数々に目を奪われる。文章には、梅沢さんと一緒に花を愛でながら歩いているような臨場感がある。そして、厳しい自然環境でけなげに咲く花たちに励まされながら、いつのまにか頂上にたどり着く。私も同じ山を辿っていたのに、見逃していた花、名前の分からなかった花が多くあった。次はこの本をザックにしのばせて登

りたいと思う。

また、梅沢さんはこれまでにたくさんの新種を発見している。リシリアザミ、ヒダカアザミ、マシケレイジンソウ、リシリハタザオなどだ。リシリアザミ発見の時は、天声人語でも紹介された。どんなに地味な花であつても丹念に観察してきたからこそ、数々の新種発見につながったのだと思う。

さらに、「その土地、場所の環境に応じてそこにふさわしい植物がある。そんな自然の美しさに惹かれます。地味で目立たないものに美しさを見つける楽しみもある」と語っている。地味な花にも心を寄せて紹介しているところが素敵だ。

チロロ岳ではヒダカレイジンソウ(新種)が、旭岳と羅臼岳でエゾミヤマアザミ(仮称)も紹介されている。私が、自分の花と決めているミツモリミミナグサも掲載されていて嬉しかった。

ガイド本はたくさんあるが、北海道の高山植物の魅力をもとに写真で表現した本はそう多くはない。この本を片手に、北海道の花名山をぜひ辿っていただきたいと思う。

(樋口みな子)

会務報告

平成24年度第3回(6月度)理事会議事録

日時 平成24年6月13日19時より
20時50分まで

場所 日本山岳会 集会室

【出席者】尾上会長、吉永・西村各

副会長、高原・森・小林

各常務理事、野澤・中

山・永田・萩原・節田・

古野・川瀬各理事、平井

監事、オプザーバー・柏

編集長

【欠席者】浜崎監事

【審議事項】

1・平成24年度支部への運営交付金、事業補助金支給方針について(小林)

支部への運営交付金および事業補助金を仮払いとして支給。5月末現在の支部員数で算定し、6月の総会終了後支払う。未使用金は返却する。(承認)

2・四国支部よりの小島烏水のレリーフ寄託願いについて(高原)

四国支部主催で「小島烏水祭」の発足を予定(来年4月14日)。顕彰碑作成のためレリーフの寄託願いがあつた。(承認)

3・京都支部よりの支部名称変更申請について(高原)

「京都支部」を「京都・滋賀支部」(略称 京滋支部)に変更したい。(承認)

4・広島支部ルーム購入について(高原)

広島支部のルームとして広島市南区大須賀町の物件を購入する。(承認)

5・福岡支部長交代について(高原)

副島勝人会員(8125)より中馬会員(6222)に交代する。(承認)

6・マナスル登山隊使用酸素補給器二式の寄贈について(高原)

大町山岳博物館への寄贈願いが資料映像委員会より出された。

(継続審議)

7・入会の申し込みについて(高原)

24人の申し込みがあつた。(承認)

【報告事項】

1・平成24年度通常総会について(高原)

出席者数及び総会議事確認の報告があつた。

2・平成24年度第1回支部長会議について(高原)

運営交付金・事業補助金支給、寄付についてなど会務報告を行なう。

3・JACへの寄付にかかわる税金について(法人運営適正化PT小林)

企業からの寄付は損金算入ができ、個人からの寄付は所得控除の対象になる。金銭以外の寄付については個別対応する。

4・YOUTH CLUB口座開設について(森)

ネット利用できる、ゆうちょ銀行口座を設立。運営には永田理事が責任を持つ。

5・日中韓三国学生交流登山日程について(中山)

中国側から登山計画書が提出された。孔雀谷での沢登り、朝天峰登山などを予定。副団長に高橋玲司会員(東海支部)を予定している。

6・基金及び積立金等規程について(小林)

5月の理事会で承認された同規程の文案を整えた。

7・国土地理院電子国土賞推薦について(森)

杉本智彦氏の「カシミール3D」を推薦した。

8・ひろしま「山の日」県民の集い(西村・萩原)

6月2日、3日に行なわれ、萩原理事、成川会員(「山の日」制定協議会代表幹事)が出席。山の日ネットワーク尾道会議の席上において「山の日」サミットへの協力を依頼した。

9・委員会総務・インターネット、財務、山研)会議 5月30日について(西村)

JAC組織・委員会の改善を中心に行なっている。今回は3回目。会長、西村副会長、高原常務理事と担当役員との打合せを行なう。

おり、改善案の実施は今期中を予定。

10・エベレスト登頂60周年記念大ネパール展(仮称実行委員会について)(会長)

ネパール政府(バットライ在日大使)が来年日本国内で主催する

もので、5月30日に実行委員会を行ない、黒川恵会員が委員長となり井本重喜会員(当会の窓口)、その他旅行社、山岳団体代表と協力して進めることが決定した。

11・国際山岳年プラス10開催について(高原)

リーフレットが完成し、参加依頼があった。

12・都岳連スポーツ指導者研修会等(高原)

「スポーツ指導者研修会・総会兼公認リーダー研修会」「公認リーダー登録・継続手続き及び研修会のお知らせ」「公認スポーツ指導者養成講習会」の案内があった。

13・日本ヒマラヤ協会役員通知について(高原)

14・山の博覧会の案内(山梨支部)(高原)

15・第14回・15回尾瀬賞授与式開催の案内(高原)

16・会報『山』6月号について(柏)

海外登山助成金を受けた登山隊2隊の報告、宮下啓三会員の追悼記事など掲載。

17・事務局職員採用について(高原)

6月1日より藤川志津子さんを正式採用した。

【今後の予定】

1・支部事務局担当者会議 7月28日(土)

2・委員会(科学、自然保護、医療)会議 6月27日(水)

3・同好会・同期会連絡会 7月2日(月)



図書受入報告(2012年6月)

著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
八嶋寛	中高年のための安全登山のすすめ(河北選書)	224p / 19cm	河北新報出版センター	2012	出版社寄贈
小泉武栄(編)	図説 日本の山：自然が素晴らしい山 50選	166p / 26cm	朝倉書店	2012	出版社寄贈
信州大学山岳科学総合研究所(編)	上高地・槍・穂高地域における自然環境の変動と保全・適正利用に関する総合研究	298p / 30cm	信州大学山岳科学総合研究所	2012	発行者寄贈
信州大学山岳科学総合研究所(編)	中部山岳地域の環境変動の解明から環境資源再生をめざす大学間連携事業	704p / 30cm	信州大学山岳科学総合研究所	2012	発行者寄贈
菊地俊朗	槍ヶ岳とともに：穂高家三代と山荘物語	207p / 19cm	信濃毎日新聞社	2012	著者寄贈
神崎忠男(監修)	山の地図帳：東京近郊日帰りハイク42コース	127p / 21cm	成美堂出版	2012	監修者寄贈
水野勉	山書との語らい	256p / 27cm	水野勉(私家版)	2012	著者寄贈
明治大学山岳部炉辺会(編)	炉辺 第10号：明治大学体育会山岳部(MAC)創部90周年	848p / 21cm	明治大学山岳部炉辺会	2012	発行者寄贈
草川啓三	登る、比良山：比良山系28山・72コース 湖の山道案内	162p / 21cm	ナカニシヤ出版	2012	出版社寄贈
坂本英夫	地理の目で歩くスイス・アルプス	179p / 21cm	ナカニシヤ出版	2012	出版社寄贈
山と溪谷社(編著)	よくわかる新田次郎：山を描ききった作家の肖像	224p / 21cm	山と溪谷社	2012	出版社寄贈
根深誠	イエティ：ヒマラヤ最後の謎"雪男"の真実	325p / 20cm	山と溪谷社	2012	著者寄贈
雁部貞夫	雁部貞夫歌集(現代短歌文庫 No.108)	195p / 19cm	砂子屋書房	2012	著者寄贈
田代博	世界の「富士山」：Mt. Fuji all over the World	190p / 19cm	新日本出版社	2012	出版社寄贈
金澤常夫	山書と共に	321p / 21cm	金澤康夫(私家版)	2012	著者寄贈
クラウド リットマン	マッターホルン(日・独・英 3ヶ国語版)	143p / 22cm	リットマン	1989	宮下啓三氏寄贈
Scagnet, Ernst	Zentraischweiz	29cm	Harlekin Verlag	1983	宮下啓三氏寄贈
Selz, Peter	Ferdinand Hodler	142p / 26cm	University Art Museu	1972	宮下啓三氏寄贈
Zbinden, Hans	Giovanni Segantini	107p / 24cm	Paul Haupt	1964	宮下啓三氏寄贈
Orell Fussli (ed.)	Zurich Vorhof der Alpen	184p / 24cm	Orell Fussli Verlag	1963	宮下啓三氏寄贈

ルーム日誌 6月

21日	20日	19日	18日	16日	15日	14日	13日	12日	11日	8日	7日	6日	5日	4日	2日
図書管理委員会 法人PT みちのり	水会 青年部委員会 つくも会	山岳研究所運営委員会 00会 スキークラブ	自然保護委員会 総務委員会 資料映像委員会	支部長会議	総務委員会	フォトビデオクラブ 二火会 山岳地理クラブ 海外委員会	休山会 理事会 山想倶楽部	総務委員会 山岳研究所運営委員会 九五会	ブ 高尾の森づくりの会 スキークラブ スケッチクラブ	山岳研究所運営委員会	常務理事会	集会委員会	図書委員会 スケッチクラブ	総務委員会 高尾の森づくりの会 法人PT	山岳研究所運営委員会

30日	29日	28日	27日	26日	25日	22日
土曜会	YOUTH CLUB 01会 山遊会 学生部	委員会会議	自然保護委員会 麗山会	山の日制定PT YOUTH CLUB 自然保護委員会	クラブ スキークラブ YOUTH CLUB 総務委員会 フォトビデオクラブ 活性化PT	山の会 フォトビデオクラブ 支部

電子国土賞受賞のDAN杉本氏講演

当会の推薦で電子国土賞を受賞した「カシミール3D」の作成者によるはじめての講演会を行ないます。YOUTH CLUBの基礎講習会の一環として行なうものですが、今回は年齢を問いません。ぜひご参加ください。

演目 「カシミールの正しい使い方」
日時 8月28日(火) 19時～21時
会場 日本山岳会104号室
参加費 会員無料(一般500円)

6月来室者
583名

会員異動(6月)

物故

西丸震哉(3059) 12・5・24
坂本矩祥(3639) 12・6・23
廣谷光一郎(5037) 12・6・10
寛仁親王殿下(10002) 12・6・6
谷村正則(12272) 12・6・8
佐藤信裕(14606) 11・10・19
退会

五百澤協子(7691)
五百澤智也(9277)
中西 實(9978)
齊藤幸雄(10101) 山梨
福田 巖(10139) 東海
葛谷 靖(10298) 東海
樽澤弘一(11055)
白勢祥三(11674)
平野友重(12256) 岐阜
霧生 功(12571)
石川悦子(12810) 宮崎
林 岩美(12856) 岩手
鈴木浩志(12942) 静岡
金内一夫(13116)
中村寿文(13575) 青森
末吉史忠(13642) 北九州
上田洋治(13862) 広島
中條好司(14054)
川田嘉夫(14121)
中島仁志(14499)

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆第19回上高地インタープリター シモン 山の自然学研究会

ガイドウォークと自然解説
期間 8月2日(木)～16日(木)
ミニトーク(19時半～約1時間)
期間 8月1日(水)～15日(木)
場所 温泉ホテル他
子供スケッチ会(10時～13時)
・スケッチクラブの協力
期間 8月3日(金)～6日(月)
場所 西糸屋山荘前
問合 榎田勁
(FAX) 045(962) 3786

◆小泉武栄氏巡検参加者募集

山の自然学研究会

小泉氏と下仁田のジオパーク
地域を観察して歩きませんか。
日時 9月1日(土)
定員 25名(往復チャーターバス)
費用 7000円(バス代含む)
集合・解散 JR国立駅
申込 榎田勁

◆「第20回山岳写真展」を開催

アルパインフォトビデオクラブ
山に登り、心に映った山々を、
それぞれの視点と感性で捉えた写
真展。国内外の山岳自然、約40点。
会期 10月4日(木)～10日(水)(10時
より18時、最終日は14時)
場所 日本写真会館5階 ポート
レートギャラリー
(TEL) 03(3351) 3002
問合 川嶋新太郎
(TEL) 03(3873) 0907

◆巡回写真展

山形支部地区
会期 8月16日(木)～25日(土)
問合 山形支部・志田郁夫
(TEL) 0234(33) 6182
信濃支部地区
会期 9月1日(土)～27日(木)
問合 柏与フオトサロン大門
(TEL) 0262(32) 7609

◆編集後記◆

●平成24年度通常総会が終了した。
概要は巻頭記事に報告した。今回
は、総会に先立って開催された支
部長会議についても記事にて報告
がある。初の女性支部長やおそ
くもつとも若いという44歳の支部
長も誕生した。

●医療委員会メンバーの医師たち
には、日本登山医学会学術集会の
報告をもらった。先月号でお伝え
した通り医療委員会に担当いただ
き、連載「山の診療所(仮)」がス
タートする予定だ。登山中のケガ
や疾病、持病との付き合い方、ケ
ガのリハビリと登山などに関する
お悩みがある方はお寄せください。
メンバー医師たちがお応えします。
●では楽しい夏山シーズンをお過
ごしください。

(柏澄子)

日本山岳会会報 山 806号

2012年(平成24年)7月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 柏澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社